

二宮尊徳と内村鑑三

下 程 勇 吉

目 次

- 一、「後世への最大遺物」
- 二、「代表的日本人」
- 三、「二宮台木主義」
- 四、日本近代化の究極的課題

一、「後世への最大遺物」

つとに「代表的日本人」を英文で著わし、武士道的基督教の立場で「二つのJ」(イエスと日本)に仕える独立独歩の無教会主義者内村鑑三(一八六一—一九三〇)は、まぎれもなく代表的明治精神であった。内村は明治二十七年七月、芦の湖畔において「後世への最大遺物」と題する講演を試み、その筆録刊行本は「多くの人がこの書を読んで志を立てる」ところとなったのであった。

この講演の主題は、「人として生れた以上、この世に何を遺すべきか」という人生の根本問題である。それは、金銭であるか、事業であるか、思想・文学であるか。その何れも、一長一短があり、何人にも可能なものでもない。それらの何れを残し得ないような平凡な人間にも、その人なりに努力すれば、その人なりに出来ることは、

何であろうか。この講演の結語に曰く、「我々に後世に遺すものは、何もなくとも、我々に後世の人に是ぞと云うて覚えらるべきものは、何もなくとも、あの人は、此の世の中に生きて居る間は、真面目なる生涯を送った人である」と云われるだけのことを後世の人に遺したいと思ひます。」

実にかかる人間こそは、内村にとつては、不滅の日本を支える國の柱なのであつた。明治三十四年十一月に書かれた「二種の日本」に曰く、

「亡ぶべき日本あり、亡ぶべからざる日本あり。」

貴族・政治家・軍隊の代表する日本、これ早晚必ず亡ぶべき日本にして、余輩が常に預言してやまざる日本國の滅亡とは、この種の日本を指しているなり。

然れども、これと同時にまた亡ぶべからざる日本あり。これ、勤勉正直なる平民の日本なり。天壤とともに無窮なる日本とは、この日本を指しているなり。これ蜻蛉洲（西太平洋の島嶼）が太平洋の底となるまでは、決して滅びざる日本なり。

余輩が忠実ならんと欲するは、この不朽不滅の日本に対してなり。彼の暫時的（暫時）にして蜂蟻（ハチアリ）的なる貴族・政治家・相場師の日本に対しては、余輩にただ憤怒あるのみ、憎悪あるのみ。」

「此の世に生きて居る間は、真面目なる生涯を送る人」として「勇ましい高尚なる生涯」を「後世への最大遺物」とする「勤勉正直なる平民の日本」こそはまさしく「亡ぶべからざる日本」であるとす内村は、かかる不滅の日本を支える典型的人物として二宮尊徳をあげて、次のごとく説くのである。「私は、近世の日本の英傑、あるいは世界の英傑と云つてもよい人のお話を致しましょう。この世界の英傑の中に、丁度我々の留っているこの箱根山の近所に生れた人で、二宮金次郎という人がありました。この人の伝を読みましたときに、私は非常な感覚を

もらつた。それで、どうも二宮金次郎先生には、私は現に負うところが実に多い。」比の人の生涯が私を益し、それから今日日本の多くの人を益するわけは、何であるかという、何でもない。この人は、事業の贈物にあらずして、生涯の贈物を遺した。「この人の生涯を初めから終わりまで見ますと、『この宇宙というものは……天の造つて下さつたもので、天と云うものは、実に恩恵の深いもので、人間を助けよう助けようとはかり思つてゐる。それだからもし我々が比の身を天と地とに委ねて、天の法則に従つて、行つたならば、我々は欲せずといへども、天が我々を助けてくれる』という考であります。その考をもつたばかりでなく、その考を実行した。……遂には何万石という村々を改良して、自分の身をことごとく人の為に使つた。旧幕の末路にあつて、經濟上、農業改良上について、非常に非常に功勞のあつた人であります。それで、我々もそういう人の生涯、二宮金次郎先生のような人の生涯を見ますときに、『もしあの人もああいうことが出来たならば、私にも出来ないことはない』という考を起します。普通の考ではありませんけれども、非常に価値のある考であります。それで、人に頼らずとも、我々が神にたより、己にたよつて、宇宙の法則に従えば、この世界は我々望む通りになり、この世界に我が考を行うことができるという感覚が起つて来る。二宮金次郎先生の事業は、大きくなかつたけれども、彼の生涯はどれほどの生涯であつたか知れませぬ。私ばかりでなく、日本中幾万の人はこの人から『インスピレーション』を得たでありましょうと思ひます。あなた方も、この人の伝を読んでごらん下さい。……私のよく読みましたのは、……『報徳記』という本です。この本を諸君が読まれんことを切に希望します。この本は我々に新理想を与え、新希望を与えてくれる本であります。実に基督教のバイブルを読むような考がいたします。故に、我々がもし事業を遺すことができずとも、二宮金次郎的の、すなわち独立生涯を躬行して往つたならば、我々は実に大事業をのこすのではないかと思ひます。」「みだりに一字をも損益せず」という態度で「報徳記」に

臨んだ幸田露伴も、尊徳を目して、「近世の君子とも豪傑とも申すべき人」としたが、「報徳記」を「基督教のバイブル」に比した内村は、尊徳を「近世の日本の英傑、あるいは世界の英傑といつてもよい人」とする、この講演を行った頃には、すでにその稿ができていた「代表的日本人」において、そのうちの一人として尊徳を登場させるのである。

二、「代表的日本人」

明治二十七年「黄海海戦勝利の翌日」^(天は前日)九月十六日にその序文が書かれた本書は、日本の將軍として西郷隆盛、封建君主として上杉鷹山、農民の指導者として二宮尊徳、在野の教師としての中江藤樹、宗教人としての日蓮の五人を「日本を代表する人物」として世界に紹介したものであるが、露伴とともに「報徳記」を体全体で読みとった内村は、「報徳記」をも「いささか誇張のものが多し」などと大所高所から気取って御託宣を下す俗流歴史家と異って、露伴に劣らず、「報徳記」の勘所^{勘とら}や要^{かな}は狂いなくつかみ取っている。眼光紙背に徹して「報徳記」を読み、尊徳と肝膽相照す一つのものを生かしていた内村は、さすがに烏山仕法の田応との心交、小田原救援仕法の際の尊徳の壁立千仞の活動、とくに天民餓死する際は、国君大夫等が万民に先んじてその罪を天に謝して死すべしと説く秋霜烈日の痛論、さらには、用意周到を極める利根川分水路工事答申書を貫く根本精神等々、「報徳記」の核心をつかみ出す点で、俗流尊徳論者の追隨を許さぬのである。尊徳精神の核心を感應道交的につかみ得る者は、東洋の古典に造詣深き寛宏透徹の文学者でなければ、宗教の真髓に徹した硬骨鉄心の基督者であって、ジャーナリストの歴史家ではないことが、ここに明快且つ端的に示されている。

しかも内村は尊徳の根本的窮極哲学を次のごとくつかみ出しているのである。小田原救援の際の疾風迅雷壁立千仞の活動をのべて曰く、「敏速・励精・困窮者に対する強き同情、『自然』とその思籠豊かな法則に対する信頼は、彼のすべての活動の特徴をなしている。」利根川分水路工事答申についても、『自然』と結んでいる者は、急がない。また現在のためのみに、事業を計画しない。彼はいわば『自然』の流のなかに身をおいて、それを助け高め、かくすることによって、自分自身が助けられ、進ませられる。宇宙を背後にもっている彼は、事業の大なることに驚かない。これは、内村独自の天道・人道観といわれるであろう。ここから、内村は次のごとく尊徳の哲学の帰結を見とどける。「この人は、自分は宇宙の永遠の法則をもっていることを意識していた。如何なる仕事も、彼にとりては、試むるに余りに難しすぎるものはなかった。しかし彼の全身全霊の献身を要求しないほど、余りに容易なものもなかった。」

ところで、好戦的日本人観の支配していた当時の世界に対して、五人の代表的日本人を紹介せずにはいられなかった明治精神の代表者内村鑑三の日本人としての卓然自立性は、如何なるものであったのであろうか。「この人には、清教徒^{清教徒}の血の通っているところがあった。あるいは、むしろこの人は未だ西洋直輸入の『最大幸福哲学』に汚されざる純粹の日本人であったと言うべきである。彼にもまたその言葉を信ずる人があった。彼の藩主は、その最初の人であった。百年内外のうちに西洋の『文明』は如何に我々を変化せしめたことよ！」かく内村が嘆かざるを得なかったことは、尊徳の四大門人の一人に数えられる岡田淡山さえも、英国功利主義経済学のひそみにならない、師の説は「財は本なり、徳は末なり、財あり、もつて徳をなすべし」と説いて、「報徳記」の著者富田高慶をして、「狂せるかな、良一郎、故先生の遺教を傷つく、一言もつて足れり」と痛嘆せしめたのであった。内村はさらにこの点に關して、曰く、「彼は『自然』^(天)がかくも惜しみなく賦与した權利を自己の道德的邪曲によって喪失した人間を『自然』に引き戻して、『自然』と人間との仲介者となった。以上のごとき我々自身の骨肉

の与えるかかる福音に比すれば、近年我が国に氾濫し来れる『西洋』のすべての智慧は、そもそも何ぞや。」

かくて日本人として天そのものに根ざす卓然自立性（テラトウチヤウリキ）を堅持する信念は、その後も終始一貫して終始変わるところがなかったのであった。内村は大正十年八月十一日に次のごとく記している。「英文『代表的日本人』改版の校正を為しつつある。今日上杉鷹山の分を終り、二宮尊徳の分を始めた。今より二十八年前に、比の著をなしておいたことを神に感謝する。真の日本人は、実に偉い者であった。今の基督教の教師・神学士といえども、遠く彼等に及ばない。米国宣教師等に偶像信者と称ばれることも、鷹山や尊徳のような人物に成るを得ば、沢山である。余は或る時は基督信者たることを止めて、純日本人たらんと欲することがある。」このように、真の日本の精神伝統の血脈に内面的に深くつながる内村鑑三の二宮尊徳の理解の深さは、その点に致命的に欠ける俗論的歴史家や単細胞的教條主義者の皮相的尊徳論とまさに天地霄壤の開きがあるのである。

かくして、二つの「J」（ジェー）（日本とイエス）を愛してやまぬ内村は、「真の日本人は実に偉い者であった」として、時として、「或る時は基督信者たることを止めて、純日本人たらんと欲する」ままに、日本という「J」の極に近づくのであるが、もともと基督信者たるところに、自己本来の島を見出す内村は、窮極的には「二宮台木主義」の立場に立つのである。ここに、日本人としての断乎たる卓然自立性の伝統を堅持しつつ、人類の普遍宗教に帰入する内村鑑三の独自性があるのである。それは伝統の台木に復帰しつつ、たえず新しい芽を出す歴史的生命的の「反復」（ケルケゴール）にはかならない。

三、「二宮台木主義」

すでに日露講和条約も調印され、それに反対する運動が暴動化し、東京日比谷の焼打ちになるほどに、国民が戦勝に酔っていた明治三十八年の十月に、内村は「奪ったものは、奪わる」という「天則」を説く基督者として、次のごとく断言している。「奪った者が奪われない歴史の大事実は、何処にありますか。掠めた者が終に掠められなかった実例は、何処にありますか。剣をもって奪ったものは、剣をもって奪いかえさる。もし人類の歴史に何か大教訓があるとすれば、走りながらも、読むことのできる比の明々白々の大教訓ではありませんか」として、「世界を日本化せんと欲して、日本は終に亡びます」と断言している。この点で、内村は窮極的には世界的普遍的地平に立つ基督者である。かかる立場に立つ日本人内村鑑三は、日本的伝統の卓然自立性を確認しつつ、その台木の上に、基督教の花を咲かせ、その実を結ばせる「二宮台木主義」を説くのである。

明治三十八年十一月発行の雑誌「人道」第八号「報徳記念号」二万部が一月余りにしてほとんどが売り切れたので、翌年六月、その号を「二宮翁と諸家」と題する単行本として発行するにあたり、編者留岡幸助はその序文において「月余にして、二万部を売り尽したる書籍及び雑誌は、我が国においては、近来稀に見るところなり。思うに、修身・齊家・処世の上において、最もその感化の大なりしものを挙げれば、泰西においては、スマイルスの『立志篇』（自勵傳）、我が国においては、富田高慶の『報徳記』ならんか」と書いているが、同書において、幸田露伴とともに、「報徳記」を高く評価する内村は、彼が自著「代表的日本人」に「農民聖人」として二宮尊徳を登場させたその動機を尋ねられたとき、内村鑑三は次のごとく答えている。「ただ『報徳記』を読んで、その偉さに驚いたからです。全く好い本です。いわば、ボズウエルの『ジョンソン伝』ですね。ジョンソンその人は、はたしてどんな人物だか知りませんが、伝記は実に面白い。なに、『報徳記』の文章は左程でもないようですが、その偉いところは、文章でなくて、事実にあるのです。」

このように、留岡は「報徳記」をスマイルスの「自助論」に比し、内村は同書をボズウエルの「ジョンソン伝」

に擬するのである。

かくして富田高慶の「報徳記」を心読し、尊徳を高く評価する内村鑑三は、「とにかく二宮翁は偉い、世界的の人物です。つまり日本の農業の極よいところを代表しているのです。……こんな今まで土地を大切に、せつせと働らく世界一の百姓が居るから、この貧乏国ももって往くのです。この土地を愛する思想の花と咲いたのが、尊徳翁でしよう。」

このように、二宮尊徳を高く評価した内村鑑三は、後期になると、自己本来の基督教中心の立場から、次のごとく「二宮台木主義」を説いている。「今になつて見ると、特別に二宮を唱道する必要は、認めません。基督教中には、あらゆるものを含んでいます。『ソロモンの箴言』など、実に深い教です。ただ古来かかる人があつたといふことは、日本の農業の改良をなせば、なし得るという恃みになるのです。いわば二宮に接木する二宮台木主義です。もちろん二宮の台木に基督教を接ぐのです。武士道だつて、武士道そのものは、つまらないが、基督教の台木にはよろしい。……二宮翁は『大学』を読みつつ、縄を索していたというが、我々の接木した二宮は、賛美歌を唱えつつ、鋤を握るのですよ。」(留岡幸助編「二宮翁と諸家」中の「愛土心と尊徳翁、内村鑑三」参照)

四、日本近代化の究極的課題

このように、内村鑑三が「二宮台木主義」を語ると、同じく基督者として、感化甦生事業に七十年の生涯を捧げぬいた留岡幸助も、「私のやつて居ります仕事は、百姓のような仕事である。百姓の天職は人間が捨てたところのものを拾つて、これを有用のものに造り変えるのであります。私の仕事も、また百姓の仕事と同じことで、一般社会に捨てられた人間、すなわち割れ目の入った人間を真人間にして社会へ再び送り返すのである。泥棒

を感化し、不良少年を訓育するのが、私の天職である。だから、報徳のお話をするのは、私にとっては、副業である。」(留岡幸助報徳講演集「二八七八頁」と語るのである。

以上見て来たごとく、終始一貫徹底的な基督者として、二宮尊徳に共感した内村鑑三は、「二宮台木主義」者であり、「洗礼された二宮翁」と称せられた、社会事業家の基督者留岡幸助は、「報徳副業主義」者であり、留岡の友人にして、尊徳の「歛鎌主義」を奉じ、神に祈りつつ働らく「祈働主義」よりして、感化事業に身を捧げた石井十次(一八六五—一九一四)も基督教と報徳教を統合して「基徳教」を唱えたのであつた。これらの人々は、何れも「真の日本人」の心の血を享けて、日本の大地に育つた二宮尊徳につながりつつ、世界的宗教としての基督教において人類的普遍の地平を開いた明治精神であつたのである。このことは、まさしく日本の近代化の究極的課題にほかならないのである。ここで想起せられることは、ペラー教授が慧眼よく次の一首に二宮尊徳の真面目をつきとめたことである。

仮りの身を元の主に貸し渡し

民安らかれと折る比の身を

いずれにせよ、この二人の歴史的人物は、超越的宗教的地平から人間の道をつきつめた点で、「慈悲寛大自己反省」という最高道德の核心を示す掛け軸に「超越科学」の印を捺した広池千九郎と彼比呼応する日本的精神伝統の高峰である。この点については、「モラロジー研究」二十二号、井出元、「神の原理」の形成、九二頁参照。

附記

なお内村鑑三・石井十次に就ては拙著「二宮尊徳の人間学的研究」増補版(広池学園出版部)七二六—七三八頁参

照。

留岡幸助については、「かいびやく」第三十三卷第一号所載の拙著「留岡幸助と二官尊徳」参照。
日本の近代化の問題については、広池学園出版「日本の近代化と精神的伝統」参照。